

相席

恒光貴久



受賞のことば  
一報をいたいた時、正直「嬉しさ半分、悔しさ半分」でした。日頃お世話になっている方々が、我がことのようになんでくれる様子を見聞きし、現在は嬉しさが勝っています。奇しくも題材は「人との出会い」。同じ趣味を持つ者同士、一瞬で打ち解けられるあの感覚。おそらく似た経験をされた方も多いと思います。そんな酒場の一コマと共に感し、楽しんでいただけたら幸いです。めでたく、来年もまだ出走権があります。今後引き続き精進していきます。

プロフィール  
誕生日はテスコガバーの桜花賞から5日後、カブラヤオーの臘月賞の2日前。1997年にタイキブリザードの応援で渡米した際、行きの機内で現在の上司と会う。現在はライターとして愛馬会の会報制作などに携わる。

絶賛再開発中の渋谷駅前だが、井の頭線西口改札を出て右手にあるエリアは、まだまだ昭和の飲み屋が健在だ。中でも、改札口から数十メートルしか離れていない「鳥竹」は人気店のひとつ。モクモクと排気ダクトから焼き鳥やら、鰻の蒲焼きの香ばしいにおいをまき散らし、思わず足を踏み入れてしまう者も少なくない。

「お祝いしてあげるから飲みに行こう」と三月半ばころに、二十年来の馬友から誘いがあった。嬉しいことに彼は私の誕生日を覚えてくれていて、四月の桜花賞の頃になると、「おめでとう！」と言いながら、競馬場でビールを一杯おごってくれることが、私と彼との間で恒例行事となつていた。

ただ、今年はいつもとはちょっとばかし事情が異なり、ビール一杯では申し訳ないと思ったのか、飲みに誘つてくれた。

「どこがいい？ 何が食べたい？」と聞いてきた馬友に對し、私は「鳥竹」をリクエストした。

「えつ？ いつものところ？ セっかく五十歳の誕生日を祝つてあげようって言つているんだから、お寿司でも焼肉でも高級なものにすれば？ 欲がないねえ」と馬友は呆れ顔だつたが、「特別だから普段通りがいいんじゃない？」それに、酒が進めば「明日の桜花賞は何買うの？」つて、オレに絡んでくるんだろ？ 高級店じやあ、周りを気にして、大声で馬券検討会なんかできやしないさ。気兼ねなく美味しい物やお酒が飲める場所が一番」と私は答えた。このこと自体は決して嘘ではないのだが、本音を言えば、半年後に彼も同じく五十歳の節目を迎える。今度は私がおごる番となり、ここで下手に高級店でもリクエストしてしまつたら、あとが怖いと若干思つたのも事実ではある。

「よし、分かった。鳥竹にしよう」。期日は私の誕生日の翌日であり、今年の桜花賞の前日でもある四月十二日に決まった。

当日はウインズ渋谷で最終レースを観て、店に到着したのは十六時半過ぎ。馬友が「二名です。入れます

か？」と店員さんに聞くと、「相席になつちやいますけどいいですか？」と言われた。馬友が私の了承を得て、「全然構いませんよ」と答えると、二階へ促された。土曜日の夕方、鳥竹で相席は決して珍しいことでない。おそらく空いていても、十七時過ぎには相席のお願いが来るだろう。階段を上がり、二階に到着すると、奥の窓側の四人席の手前側、二席へ通された。

煙でいぶされた薄暗い店内。お世辞にもオシャレな空間とは言えないが、その分、何十年も前からオッサンたちの天国となつていた。若者の言葉を使えば「エモい」場所である。

そんな鳥竹にもインバウンド需要の波が押し寄せている。英語や中国語など、様々な言語が飛び交うワールドワイドな場所と化していた。「私たちの相席相手も外国人か？」と一瞬思ったが、そこにいたのは、夫婦と思しき日本人の高齢者男女だった。

「すみません。お邪魔します」と簡単な挨拶を交わすと、ご婦人が「よかつた、日本人の方で。外国の方

だと、何か質問されるんじやないかと。緊張していたんですよ」と笑顔を見せた。

すると今度は男性が「競馬、お好きなんですか?」

と、馬友が手に持っていた競馬新聞を見て反応した。

「はい。今も競馬帰りなんです。明日の桜花賞の話でもしよう。なるべくお二人の邪魔をしないように気をつけますので」と私が答えると、「いやいや、奇遇ですね。実は私も家内も競馬ファンで。全然構いませんよ。楽しくやつてください。遠慮なく、盗み聞きさせてもらいますから」と四人で笑つた。

「実はコイツ、昨日が五十歳誕生日で。お祝いしてあげようと、飲みに誘いまして」と馬友。「それはおめでとう!」と、会つて数分しか経つていらないのに、一緒に乾杯までさせてもらうほど、一瞬で打ち解けた。

年輩の競馬ファンの方と酒の席をご一緒にする時、私には自己紹介の常套句がある。

それは「テスコガビーが桜花賞を勝った五日後、カブラヤオーが皐月賞を勝った二日前に生まれました」。七十代以上の方々はそれを聞くと、「おつ! 菅原泰夫だ!」と、当時を懐かしんで競馬話に花が咲く。だが、この日のご夫婦の反応は、未だかつてないものだった。

顔を見合わせて、目を丸くして驚いたお二人の様子は、何か触れてはいけないことだったのか? と、むしろ私が戸惑うぐらいだったが、「いや、実は私、名前が泰夫っていうですよ。漢字も菅原泰夫騎手と同じ。競馬が好きになつたキッカケも、テスコガビーとカブ

ラヤオーに菅原泰夫騎手が乗つていたことなんですね」と伺い、驚いたようなホッと一安心したような。

「当時一世を風靡して、同じ泰夫として応援したのが、全ての始まり」と興奮気味に教えてくれた。

「もうあれから五十年も経つんですね。じゃあ、私は競馬ファンになつて五十年目になつたということですね」と、再度四人で乾杯した。

「テスコガビーやカブラヤオーってどんな馬でしたか?」と私が聞くと、今度はご婦人が「強かつたけどドキドキさせる馬でしたね。特にカブラヤオーは、ダービーの最後の直線でフラフラして。怖がりだから逃げ馬になつたっていう逸話もあつてね。ダービーは府中に行つて応援しましたよ。もう心臓に悪かつたです」と笑いながら教えてくれた。

「結局、あれがカブラヤオーを見た最初で最後のレースになつちやつたね。それが残念でしたけど。今でも一番思い出に残るダービーといえば、カブラヤオーのダービー。それは一生変わらないでしようねえ」と泰夫さんも当時のことを懐かしんでおられた。

「この人、カブラヤオーやテスコガビーで競馬の虜になつちやつたから、そのあとも逃げ馬が大好きなんですよ」。

「プリティキヤスト、アイネスフウジン、ミホノブルボン、ツインターボ、サニーブライアン、サイレンススズカ、最近だとパンサラツサも好きだったねえ。なんか逃げ馬つてロマンがあるじゃないですか。競られて、マークされて。つかまつちやうと、シンガリまで

負けちやう時がある一方で、勝つ時は何馬身も突き放したり。強さと弱さが同居しているところが憎めなくて。気が付いたら逃げ馬の馬券を買つちやつています」

「じゃあ、明日の桜花賞も逃げ馬から買うんです

か?」

「何が逃げますかね? それが逃げ馬ファンの辛いところなんですよ。こつちは逃げると思つて買つてているのに、出遅れたり、ジョッキーが意気地なしだつたり。逃げ馬を応援したいけど、何が逃げるか分からないうちは本当に難しい。明日の桜花賞はイマイチはつきりしないのでね。エンブロイダリーとか、逃げませんかね? ビワハイジのひ孫でしょ? 逃げて欲しいよなあす」と笑いながら教えてくれた。

こんな具合に相席であることも忘れて、競馬の話が弾み、楽しい時間を過ごした。

心残りは連絡先を交換しなかつたこと。競馬が好きで、同じ酒場に顔を出す間柄なら、いつか再会するのは必然だろうが、はたして泰夫さんは桜花賞の馬券を的中させたのだろうか、今年の宝塚記念を逃げ切つたメイショウウタバルは買つていただろうか。と今となつては伺いたいことがすっかり増えた。

とりあえず半年後、菊花賞直前の馬友の誕生日の頃、再び二人で鳥竹へ足を運ぶだろう。泰夫さんご夫婦と再会できるのか、それとも、また違う出会いがあるのか。競馬ファンになつて良かった、と思う出来事のひとつだつた。